

生の目的、死の理由

新道知樹

前編 生の目的

一体何度目だろう。

分からないことではあるが、別段深く悩むものでもないのに。

ただぼおつとしている時にふと見えたかと思うと、いつの間にか目の前にそれしか映らなくなる。そしていつしか頭がそれで一杯になり、するとそれは僕の心に汚らわしい一撃を加えて、高笑いしながら逃げていくのだ。それは答えなんてないような（ようなは必要ない気がしないでもない）問いかけである。

僕は何で生きているのだろうか？

コイツは時々、絶対の自信と余裕を持って僕に詰め寄る。僕は負けまいとあらゆる理屈屁理屈を駆使して対抗するが、結局最後は負けてしまい、ムカつきを味わうのだった。

……僕はどうかやれば勝てるというのか。
今の僕には、分からない。

憂鬱な月曜日の朝。

玄関の戸を開ける前に後ろを振り向く。

「いつてきます」

いつも通り、お母さんは軽く微笑みながら、
「いつてらっしゃい」

と弱いあいさつを返す。本来なら、お母さんは病院にいるはずの人間なのだ。辛いなら寝ていてもいいよ、と言おうとしたが、親心という文字を考えると口に出れなかった。代わりに僕もこつと微笑んだ。

風を切りながら自転車を颯爽と走らせるのは清しいが、最寄の駅まで行くのは少し疲れる。高校生だからといって普段運動をしていない僕は、駅に着く頃には額に細やかな汗が出てしまう。それでも、田舎特有の田園風景は落ち着きを与えてくれるし、寂れながらも活気付いた商店街はやる気を注いでくれる。一日の始まりには中々良い環境だと思う。

だがそれも電車に乗ってからは一変する。朝という通勤通学の時間帯だと、当然車内は混雑の極みだ。ごっちゃになった話し声の合唱はイライラを与えて下さるし、人がでたらめに凝縮されている画面は倦怠感をお注ぎになられる。一日の始まりには中々気持ち悪い環境だと思う。

僕の通学路には三つの関門がある。そのうちの第一関門がまさにこれだ。授業を受ける前の学生のモチベーションを低下させるのもってこいの通学方法だが、みんなこれに耐えているのかと思うと自分を情けなく思うので、こんな愚痴は心の中に留めておく。そんなの当たり前だが、やっぱり我慢するのはストレスしか溜まらない。

やっときゆうぎゆう詰めむさ苦しい小部屋から退出して開放感を味わうが、それもつかの間、改札口への道のりという第二関門がぶつかってきた。高校に入ってから何度も経験するようになった駅特有の煩雑なごみに慣れてしまうという事は無いと思う。いや、無いほうがいい。そんなに慣れてしまったら、また一つ人間らしさを失ってしまいそうだ。

うごめく人々の流れに逆らわないことで無事に改札口にたどり着き、カードを専用の機械に触れる。ピツという電子音を後にして駅から離脱すると、県庁所在地らしい現代的な都会風景が目に入った。そしてそこには、

第三関門、都会の中を歩く人々が待ち構えていた。はあ？ という声が聞こえてきそうだが、こればかりは第三関門の名に恥じないものがある。

さつきまでとはかく密度が高かった（だけ、と言っても、圧迫されている気分になるから胸苦しいしイライラするし倦怠感も募る）。しかし、ここで問題となるのは、「都会の人々」だ。少し話が長くなるが、僕が初めて高校へ行ったのは県立受験の日で、当然ながらこの道路を通るのもその日が初めてだった。緊張はしなかった。過信ではなく、自分の学力が十二分にあることは明らかだったからだ。ただ普段通りの自分で試験を受けるだけ。それだけを考えていると、前から歩いてくるおばあさんを見つけた。おばあさんもこちらに気付いているようだった。距離が大分縮まってきたところで、こんにちは、とおばあさんに聞こえる程度の声で頭を軽く下げながらあいさつをした。だが、おばあさんはスツ、と目線をわざとらしく逸らし、無言で通り過ぎてしまった。相手がお年寄りということを考えて、僕の声がよく聞こえなかった可能性もあったが、どう見てもあからさまにこちらを敵のように思っていたかの動作だった。これが都会か。そう見切りをつけるのは誰よりも早く、そして正しかった。僕の住んでいる地域でこんなことは有り得ない。人の違いは環境で変わってしまったものなのだろうか。うまく適応しているとさえ聞こえは良いが、だとしたら人間なんて所詮こんなものかと思ってしまう。

ともかく、自分の住んでいる場所が場所だから、例え誰であろうと人と会ったときは必ずあいさつをする習慣がついているので、無言ですれ違ふのには並々ならぬ抵抗がある。もしこの抵抗が無くなってしまうたら、これまた人間性が失われかねない。

通学でさえ、僕にとっては辛いものだ。

形式的には学校はゴールのはずだが、むしろ逆。これからが本当の戦いだとはまさにこのこと。そのうち分かるが、これから過ごす時間は自分の人生を無駄にしていると思えない程、僕には辛い。

この高校は県内トップ校だというのは、現実を見ず思考停止した奴の妄言だ。ここ最近のデータを見ればただの進学校にすぎないことが丸分かりだ。多分この生徒と職員の大半は分かっているはずだ。

そんなことを言っている僕だが、成績に関しては問題ない。テストでは常に一桁の順位だし、肝心の全国順位は二桁、T大合格圏内であることは明らかだ。別に自分を自慢するわけでもないし、過小評価するわけでもない。ただ単純に自分の努力が成績に反映されただけだ。

しかし世の中勉強が全てではない。中でも人付き合いは生きていく上で最重要だ。学校生活においてもそうだ。無論そんなことは分かっている。分かっているが、どうしてもクラスに馴染めない。友達なんて一人もいない。地元の幼稚園、小学校、中学校には少ないながらも確かにいたのだが、ここにはいないのだ。

どうしてか。やはり悪いのは自分だろう。最低限のルールとかマナーとかさえ守ればどんな生き方してもよいと思っただけだ。だってそうだろう。これなら誰にも迷惑はかからない。寧ろお手下となる生き方ではないだろうか。だがそうとは言えない理由がある。先にも述べた通り、これでは「友達が出来ない」ということだ。自分から積極的に行動すればよいだけの話だが、僕にはその積極性が足り無過ぎた。勉強するためだけなら、やはり学校に行く意味が無い。あなたも行くわけがないだろうか？ そこには友達がいて、ただ楽しく過ごすことに意味があるのだろうか？ そうだろう？

孤独というのは、ある意味自由で、そして寂しいものに、僕は思える。

朝のチャイムが鳴る。同時に担任の先生が教室に入り、友達と喋っていた生徒たちは即座に自分の机へ戻る。

「起立」

はあ。帰りたい。勉強なら家でも出来ます。そんな愚痴を心の中でこぼすのが日課になってしまった。

「礼」

おはようございます。

「着席」

そしてさようなら。それで帰れたならどんなにいいだろう。

先生が出席をとり始めて各々の苗字が呼ばれる中、僕は教室のドアの窓を通して、何やら黒くうごめいているものを見つけた。

ぼやけていてよく分からない。どうせ通りすがりの生徒か先生だろうと思っただが、いつまでももじもじとしていたので、怪しがつっていると、いつのまにか先生の声が聞こえなくなり、

「え、皆さん、知っている人もいると思いますが、ここで転校生を紹介したいと思います。それじゃあ、入って」

クラス中がざわめく。後ろの席から、俺知ってたぜ！ と誰かが言った。言うまでも無く、転校生が来るという情報が僕の耳に届くわけが無い。

転校生。小説やドラマではよくあることだか、実際に自分の学校に、それも同じクラスに来るのは滅多に無いことではないだろうか。何故だか新鮮な気分になる。

ガラガラ、とドアが開く。現れたのは、どこにもいそうな男子だった。特徴というと、緊張しているのか性格からなのか、おどおどした様子でいることぐらいしか目立ったところはない。

教壇に立っている先生の隣まで来たところで、こちらを向いた。
「それじゃあ自己紹介をお願いします」

「あ……はい」

成る程。この時点で彼の人間像がはっきりと見えてきた。今のおどおどした様子は緊張からだ。普段はこんなではないだろう。彼の目を見ると分かるが、堂々とクラス全体を眺めている。それに姿勢。背筋が伸びており、両手の指も真っ直ぐで、かかともくっついていて、自然とこんなに綺麗に立っていられるという事は、只者ではない。

彼は天井を見上げて軽い深呼吸をし、もう一度こちらを向いた。途端に、

さっきまでのおどおど感が一瞬で消え去ったような気がした。

「今日からこの学校に転校してきました、相沢海斗（あいざわかいと）と言います。えっと、学校生活に慣れるまで何かと迷惑をかけるかもしれませんが、これから皆さんと楽しくやっていきたいと思しますので、どうぞよろしくお願いします」

歓迎の拍手は、まばらながらも温かいものがあつた気がした。

その後、相沢海斗と名乗った彼にクラスの大部分が詰め寄せ、会話を交わした。だが僕がそこに混じることにはなかった。

時計の針が午後四時を示した。

キーンコーンカーンコーン。

終わった。やっと終わった。

僕のように、学校に行つて誰とも話さない生徒なんてそうはいない。多分、僕みたいな人はこの世にたくさんいる。そして学生としての毎日をうんざりしながらも仕方なく過ごしていることだろう。

そそくさと学校を出て駅に着き、電車に乗った。運良く席が空いており、座ることができた。

僕はバッグから英単語帳を取り出し、付属の赤いシートを使いながら、勉強し始めた。時間を無駄に過ごすのは暇人だけだ。有効利用しなければ無情に過ぎていく。

数分後、ひとりでドアが開いた。これが閉じたら発車するのだろう。

すると一人の学生が急いで電車に乗ってきた。全力疾走したのだろう。ゼーゼーハーハーと息を切らしており、両手でひざを押さえながら前かがみの状態になっている。まさにランニング直後の姿だ。なんとなく見ていると、その学生がふと顔を上げ、僕と視線が合った。学生ははつとした表情になっていた。そして僕も驚いた。なぬつ、転校生じゃないか。

我が校で電車通学するのは極わずかだ。なんと九割以上の生徒が地元出

身だからだ。こんな高校他にあるのか。彼がここに居るのは確率的に十分
びつくりだが、さらに驚いたのは、彼がそのままこちらを直視しながら近
づいてきたことだ。まさか顔を覚えていたのか。

僕の正面に立った彼が言った。

「えっと……赤星、望くん、だっけ？」

名前まで覚えていやがった。

「そうだけど……」

あまり長く喋るのは苦手だ。即刻、彼にはどこかへ行ってもらいたいの
だが、

「……一先ず、ここ空いているから、座りなよ」

「ああ、そうだね」

そんな願いが叶うはずがなかった。

そんな僕の心情を知らない彼は、よいしょ、と口に出しながら座った。
田舎のにおいがする。

「ごめん、学校では話せなかったね。他のみんなに捕まっちゃって……」

「？」

話すことなんかあったか？ いや、あるわけがない。

「いや、一応、ちゃんと一人一人に挨拶したり、少し話したりしたほうが
いいのかな、って思ったから」

律儀な奴だ。そこまでするのは珍しいタイプだ。

「構わないよ。それより、クラス全員の顔と名前をもう覚えたなんてすご
いな」

「ん、そうかな。模試で全国順位二桁とっちゃう人の方がよっぽどすごい
よ」

ぶっ！ ちょっと待て。もしかして僕をからかっているのか？ それな
ら話を变えさせてもらおう。

「それはすごいだろう。でも相沢はこの学校に来たんだろ。ならそれ
なりの学力はあるはずだが？」

「ん、どうなんだろ。分からないや」

……はあ？

「具体的じゃなくて大体でいいから」

「ごめん、本当に分からないんだ。というか覚えていない」

……はあ？

「冗談抜きでか？」

「うん」

何て奴だ。まあそれならしょうがないが……。

「……成績は気にしない性分なのか？」

「いや、そうじゃないかな。正確に言えば気にする必要がない、ってなる」
成る程。ということは……、

「予想だけど、相沢の将来の夢、に学歴は関係しないってことか？」

「おう、よく分かったね。そうだよ」
何故だろう。気になる。

「出来れば教えて欲しいんだが、いいか？」

「あ、うん。えっとね、総理大臣」

??????

「冗談はよせ」

「本ただよ」

「本当に？」

「そう、本当に」

！？ 本気で言っているのか、こいつ。

鎌をかけてみる。

「へえ、随分ご大層な夢だな。汚れた金とか醜い権力闘争に興味があるの
か？」

だが僕の鎌ははじき返された。しかも悪いことに、それは相沢の逆鱗に
触れたようだ。眼光が鋭くなっていた。ひやりとした威圧感を感じる。

「……言っておくけど、僕は汚い真似はしないでトップに登りつめるつも

りだよ。そのための覚悟もあるし、決意もある。前に決めただよ。この国を変えるって。」

……ウケアリ、か。

「変なこと言ってる悪かった。どういう経緯でそういう道を選んだかは聞かないでおく」

「いいよ、分かってくれば。それじゃあ赤星くんの夢は何なの？」

夢、か。そんなもの、

「無いよ」

「……無いの？」

「ああ。そもそも生きる目的がない」

会って間もない奴に何を言っているんだ、僕は。

「何で生きているのか分からない。だから僕はやるべきことだけを、だから今は勉強をやる」

何を言っているんだ、僕は。

たかが他人にそんなこと告げてどうする。悩みをぶつけるなんてただの自己満足じゃないか。現実が変わらない。

少しの間会話が途切れた。だがそれは相沢の思考時間に過ぎなかった。

そして彼は、僕の宿敵を倒す為の答えを与えてくれた。

「……多分ね、赤星くんには、『人生を変える出来事』がないんだと思う。

僕はかなり早めに経験したけど。だから、それまでは今のスタイルでやっていけばいいと思う。それでいいと僕は思う」

人生を変える出来事……。確かに無い。平凡な日常が過ぎ去っているだけだ。だからか？ 「僕は何で生きているのだろうか？」なんて疑問に答えられないのは。だからか？ 自分がこんなにも貧しい人間なのは。

「ありがとう。参考になったよ」

「えっ？ ああ、そう？ なら良かった」

相沢は微かに微笑んだ。何か温かいものを感じる。

窓の外が目に入って、僕はもう着く頃だと察した。一分も経たないうち

に電車の速度が遅くなり、僕の降りる駅に着いた。

「それじゃあ僕はここで」

「あ、ちよつと待って」

「何？」

「朝はいつも六時四十分の電車なの？」

「そうだけど……」

「なら明日一番後ろの車両に僕がいるから、良かったら乗って来てくれな
いかな？」

「構わないよ。それじゃあ明日」

「ありがとう！ じゃあね！」

駅からメロディが流れ始めたので、僕は急いで降りた。扉が閉まり、電車はゆっくりと発車し、そして見えなくなった。

こんなに長く話したのは初めてじゃないのか？

お母さん以外で笑顔を見たのは久しぶりじゃないか？

こんなに心が穏やかで、快くて、気持ちがいいのは、いつ以来だろうか？

気分が良い。胸が躍る。そして、楽しい。

翌日、六時四十分の電車に、一番後ろの車両に、相沢海斗のいるところへ乗った。おはよう、と挨拶して、雑談して、車内の混雑さに啞然として、

共に学校まで歩き、教室内でも喋り、帰りも徒然とした会話をして……。

また次の日も同じように過ごし、さらに次の日も、その次の日も、その

また次の日も、それからまた次の日も……。

そして……、

そして。

そして。

そして。

思った。

(彼となら、僕にとって最高の友達になれるかもしれない)

心からそう思った。

この時は、恐らく僕の人生の中で最も「生きている」という実感があつたと思う。

それは儂く、淡い、未来への希望をももたらした。決して見えるものではないが、まさしく希望だつた。

そう、最高だつたのだ。人生の極致だつたのだ。

——そのまま全てが上手く進めば良かったのだ——

お母さんが倒れた。

唐突だつた。でも分かっていた。この時が来ると。

医者のお言葉は僕に深く、深く刻みつけている。

「あなたのお母さんは、もう長くありません」

いつ、命の灯火が消えてしまうのか分からない。一年後？ 一カ月後？ 一週間後？ それとも、明日？ そんなの誰も分からない。

お母さんは言った。

「それなら、私は残りの人生を、この子と過ごしたいです。もう覚悟はできていますから、どうか最後に、私の願いを聞いてくれませんか？」

勿論、僕も医者も反対した。医者はいい奴だつた。可能性がゼロでも、絶対にあきらめない。矛盾している、なんて関係ない。私はそう決めて医者になつたんだ、と仰っていた。この医者なら、僕はお母さんの命を預けても良いと思つた。だけど、それでも、お母さんは、嫌です、と自分の意

思を貫いた。

それで察しがついた。これは言葉では説明できない。医者は、何かあつたら病院ではなく私に連絡してください。私の全てを懸けてなんとかします。そう仰ってくれた。

僕は医者に連絡した。

すると、時間的にも車の速度的にも通常では考えられない速さで、救急車が来た。対応の異常なスピードから、医者が個人の独断で動いているのだと思つた。

それから病院へ着き、緊急オペが始まつた。その間、僕は椅子に座りながら、指を組んで祈っていた。お母さん、生きて。生きてくれ。死んじやだめだ。生きてくれ。頼むから……。

ふと目の前に医者が現れた。こっちに来て下さい。そう呼ばれて誰もいない診察室らしきところへ向かつた。

部屋へ入り、互いが向かい合うよう椅子に座つた。空気が淀む。時が止まる。再開の合図は、医者の言葉。

狼煙が上がつた。僕の全身が強張る。医者の言葉の一つ一つが僕の心に刺さっていく。だが、次に言つた言葉は、あまりにも残酷で、無情で、そして、悲しかった。

命は助かりましたが、もうお母さんが意識を取り戻すことはありません。

これが何を意味するか。そう、脳死。

それを聞いた途端、悪魔が僕を支配した。思考が途絶える。感情が枯れる。自分が消えかかる。

やがて、僕は泣き出した。喚きはしなかったが、嗚咽と鼻水を啜る音が部屋中に響いた。こんなにも激しく泣くのは、これが初めてだつた。生き物の性なのか、涙は止まることなく流れ続けた。医者はただこちらを見るばかりだつた。

家族の死は、人間生きていれば誰でも経験することだ。逃げることなどできやしない。それに、お母さんは死んでなんかない。生きている。生きていくことに間違いはない。

じゃあ、この圧倒的な虚無感は何なんだろう？

自我が乱れていくようなこの感覚は何なんだろう？

今を生きている気がしないのは何故だろう？

.....

ああ、そうか。

結局、僕にはお母さんが必要ってことか。

僕の人生の根本にあるのは、お母さんだったってことか。

だから、こんなにも悲しいのか。

「望君、私が言えるのはここまでです。望君がこれからどう生きていくのか、君自身で考えて下さい。それが残された者の宿命です。しかし、可能な限りサポートはするつもりです。それに、私はまだ、あきらめていません。だから望君も、希望を捨ててはいけません。生きる意味を失わないで下さい。」

希望.....、生きる意味.....。

.....

「.....先生、」

「.....何でしょう？」

「.....僕は、医者になります。あなた以上の医者になります」

「.....望君の人生は、それでいいのかい？」

「はい」

「お母さんを、助けたいんです」

無心だった。でも思いの丈は根強かった。矛盾だ。

この時、ぼくは正気だったのか、狂気に侵されていたのか。良くも悪くも、助きたい、というその一心しか頭に無かった。

相沢、聞いているか。

僕の人生が変わったぞ。

生きる目的を見つけたぞ。

後は、それを達成するだけだよな。

後編 死の理由

頭が痛い。知識が圧迫してくる。理論がねじれ込んでくる。数ヶ月が経ち、僕はやるべきことをしていた。といっても、今まで通りの勉強に医学を足したままだ。医学を高校生が学ぶのは不可能ではない。

だが、流石に学業と並列して行うのは無理があった。

でも、やるしかない。

今からやらないと、間に合わない。

気付いたら朝になっていた。今日も寝ていない。二日連続だ。明日は倒れるかもしれない。

それでも、やるしかない。

「赤星くん、無理は禁物だよ。それじゃあ何一つ頭に入らない」

電車の中で相沢が言った。

「時間が無いんだ。これくらいは当然」

「……」

リミットは神様の気まぐれ。人が太刀打ちするためには莫大な力が必要だから、代償も大きい。

授業中の大半は医学書を読むようになっていた。教室内で自分が異質な存在だというのが身にしみてくる。孤独ではなく、完全に隔離されている気分だ。

だがどうでもいいことだ。目的が達成できれば全てが報われるのだから。何だっける覚悟はある。

しかし案の定、僕は倒れた。視界が暗くなったと思ったら、急に意識が遠のいた。この説明しがたい無の感覚は初めて味わった。下校中だったので、相沢が一九のボタンを押し、ぐったりとした生温かい肉体は病院へ搬送されることとなった。別に救急車を呼ぶほどでもなかったのに。

何時間たったのだろうか。目が覚めて、何も考えることが出来ずにぼおとしていた。はあ。

しばらくすると、廊下からこちらへ誰かが向かってきた。その人物が完全に視界に入ると同時に、それがきっかけで意識が完全にはっきりした。

見ると、いつもの医者だった。

「気分はどうですか？」

「……悪くは無いです」

「それは良かった」

しばしの沈黙。恐らく医者は何か重要なことを言おうとしているのだろう。でなければ勤務中にわざわざ来るわけが無い。じつと僕の目を見つめていた医者がついに話し出す。

「勉強、頑張っているみたいだね」

いつもより声が低く聞こえた。

「それは勿論」

次にどんなことを言うのか、大体は見当がつく。正直、この予想は当たって欲しくない。この手の話は最終的には本人の意思が全てだから、どれだけ話そうが、生み出すのは無駄に経過した時間だけだ。

「そんな生活で望君は、何を得られると言うんだい？」

やはり相沢と同じことを言いたいってわけか。うんざりする。

「時間が無いですから、これくらい努力するのは当然です」

そう。当然なのだ。仮に時間が十分にあるならば計画的に勉強する。こんなに過労する必要など皆無だ。だがそうは問屋が卸さないのが現実。

全ての理由は、お母さん。

繰り返すが、僕がこんなに自分を酷使してまで勉強するのは当然なのだ。誰も否定できない。分かるはずだろう。優先すべきは目的。部活動に然り、受験勉強に然り。

こう考えていた。説明すれば納得してくれるだろう。

しかし、妙に険しい表情をしながら医者はとんでもない台詞を吐いた。

「……望君は考えが足りません」

何を……何をこの医者はほざいているんだ。心の中から暴言と共に怒りが湧いてくる。

「それは一体どういう意味ですか？」

生ぬるいことを言い出したら怒鳴ってやろうと思った。僕は自分の行いを否定されるのを許せなかった。何故なら、それはお母さんの命を見捨てるのと同義だからだ。

だが憤怒を表したのは医者が先だった。

「その行為が無駄だと分かっているながら、何で望君は続けているんですか！」

「ここまで怒つたのを僕は初めて見た。その激しい表情、声、目つきを見て、心の底から恐れを感じた。」

「気持ちには分かりません。確かにお母さんを治すためには医学を学ばなければいけませんし、かといって、普通の医学生のように経験を何年も積んでいては、望君のお母さんがもちません。ですが、今の君はゴールしか見ようとしていません。盲目です。暗闇でもがいているだけです。全体図が分からないのに進んでいるから、体力だけが磨り減っているのです」

言っていることはだいたい合っている。しかし、

「あなたは時間に余裕を持ちすぎだ！ 今だってお母さんは病氣と闘って苦しんでいる！」

「だからって望君のやり方が正しいわけではありません！ ……もっと落ち着いてください。もっと心にゆとりを持ってください。そうするだけで今よりも知識が頭に入るはずですよ」

私はこれを言いたかったのです

……違う、そうじゃない……

「……もう、あなたの言う通りにしては手遅れなんです。以前だって、目に見えてお母さんは弱りに弱りきっていたんです。そんなお母さんにこれ以上辛い思いをさせるのは嫌なんです。あなただって分かるでしょう？ 救いたいですよ？ でもあなたは他の患者さんも受け持っているから、今までみたいな特別扱いをするのが限界点です。だから真の意味で人生を懸けてお母さんを救うことが出来るのは、……僕だけなんです。なのに『心にゆとりを持つ』なんて甚だしく傲慢です。休みたくても自製心で努力するべきなんです。じゃないとプライドが許しません」

結局はそういうことだ。目的のために全力を注ぐ。たとえまた倒れるこ

とがあっても、努力を惜しんではいけない。そしてその決意を行為で現さなければならぬ。

「……今日はお世話になりました」

「まさか帰るんじゃないだろうね」

「異常が無いんですから、病院が僕を引き止める理由も無いですよ？ それでは」

僕はベッドから降り、側に置いてあったカバンを持ち、部屋から出ようとした。しかし、後ろから、

「……望君は一ヶ月も経たないうちにまた倒れます。そうなる前に早く自分のやり方を変えてください」

振り向いて、僕はドアを閉めた。

さっきの医者の声は頭の中へ入った後、廊下を歩いているうちに消えた。

二週間ほど経ったある日。

医者の言葉など聞き入れるはずも無く、僕は今までのやり方を貫いていた。だが、自分の内面をより見るようにはなった。だがそれがいけなかった。

自分と向き合っている時、自分のやり方は自己満足じゃあないだろうか、などと思つたことがあつた。——これだけ頑張りました、はい良くできました、でも勉強した分だけちゃんと頭に入ってる？ いや、頑張ったんだからいいじゃん——のように。だが、僕のやり方は決して自己満足ではないことに気付いた、と同時に、嫌なものまで浮かんできた。

僕のやり方は、ただ一心にお母さんを救いたいという「希望」からくるもの、というのが今までの自分の考えだった。だが本当は、お母さんが死んでしまうという「恐怖」が僕を動かしているのではないか、という疑念が出てきたのだ。いや、むしろその「希望」の根本に「恐怖」がある、とも思うようになった。

確かにお母さんが死ぬのは怖い。だが、そのために過剰に自分が焦って

いるのを認めたくないだけではないか？ いや、お母さんを救うためにはこうしなきゃいけない、いや、だからそれに意味はあるのか？ いや、努力しなければ救えない、いや……………

僕はこのような自問自答を繰り返していた。そして、泥沼にはまった。考えれば考えるほど、自分の心の中がどのようなものなにかますます分からなくなり、精神的な疲労が自分を蝕んできた。何がなんだか分からない。七時間目も、そんなことを考えながら授業を受けていたので、表現しにくい、頭が気持ち悪くなっていた。うつ病とはこういうものなのだろうか。

微かにチャイム音が聞こえたような気がした。起立、礼、掃除のために、生徒たちが机に椅子を乗せ、後ろへ下げ始めた。そして、僕も机を下げておるときだった。

うつすらのだが、自分の後ろの方から声が聞こえた。「……………なあ、なんで赤星って最近体調悪そうなんだろう？」

「さあ。どーでもいいじゃんあんなウザい奴」
「だよな、死ねばいいのに」

もうその台詞は聞き飽きた。コイツら、いや、今時の若い奴は赤の他人を自分より下に見ている。三人目は別に心から死んで欲しいと思ってる訳ではない。三人とも、ただなんとなくそんな台詞を吐いただけなのだ。そこには一切の感情が含まれない。

どうでもいい。いつもならそう思うはずだった。だが、今日はそうはいかなかった。

「ホント、早く消えればいいのに」

その声は、相沢のものだった。

(なっ……………！)
「なんだ、みんな思うこと同じじゃん」

「当たり前ーだろ」

(相沢が……………そんなこと……………言うはずがない……………だろ?)

「目障りなんだよねえ」

また相沢の声。

(友達……………なのに……………どうして……………?)

急に激しい動悸がしてきた。続いて、全身から気味の悪い寒気が噴出し

てきた。嘘だ。嘘だ。嘘だ。

(まさか……………元から友達だと思っていなかった……………?)

(ただの喋り相手ぐらいにしか……………思っていなかった……………?)

音なんて聞こえずとも、その消滅は自分自身に響き渡っている。そして、それは二度と帰ってこないように思われた。

僕は机を力いっぱい引いて、定められた位置に置いた。だがこのとき僕は何も考えていなかった。頭が真っ白なんて表現は間違いだ。圧倒的な悲しみと、無が身体を我が物にしていたのだ。

すぐさま荷物を取るや否や、全力で教室を出て行った。

なんで、どうして、なんで、どうして……………

どうしようもないことを思い浮かべていた。次に、本当にどうしようもないことを自覚させられた。それで、今は全てがどうでもよくなってしまった。

僕の人生の根本にあるのは、お母さんだったはずではなかったのか。だが、それは間違いだということに認めざるを得なかった。

家に着いて、無性に八つ当たりしたくなった。悲憤感がまとわりつきながら、まずはドアを蹴った。ガン。靴下のままだったので、痛みを感じた。だが意には介さない。もう一度蹴る。ガン。すると、ミシッ、と音がした。だからなんだ。最後に自分の最大の力を込めて蹴った。ガン。三回も蹴られたドアは、ただ淡白な音を発するだけだった。

数分間呆然と突っ立っていると、今度は叫んでみたくなった。肺に入る最大量の空気を取り込む。滅多に使わない腹筋に力を込める。そして叫ぶ。行き場の無い怒りを込めて。叫ぶ。どつと溢れてくる悲しみを込めて。叫ぶ。裏切られた過去から逃れるために。叫ぶ。何もかもを忘れるために……。

声は腹の底から出したつもりだったが、ただの一般的な家のなかで反響するはずがなく、一瞬で消えた。

まもなく、僕は床に仰向けになった。目を閉じた。

何も考えたくなかったが、自然と今までの幻影を思い浮かべてしまう。始まりはちようど昨日のことみたいに感じた。あれは不意打ちだった。だが新鮮だった。新しい風を、その時は感じた。人の良さを肌で知れた。そのお陰で僕は変わり始めた。

一人と二人では差がありすぎる。いや、全く別のものだ。その重みを理解できるのは、両方を経験したのだけだ。と言っても、殆どの人間がそうであるはずだが。

楽しかったよな。そんな日々が。

目に見えなくても、輝いていたよな、友との時間は。

(楽しかった……でも、もう戻って来ないんだよな……)

(結局、僕に友達なんて……できやしないんだ……)

(また一人で過ごすのか……一人で……)

一人？

いや、違うな。

今でも側にいてくれる、この世で一番大切な人がいるじゃないか。

(そうだ……お母さん……。僕にはお母さんがいる。お母さんがいてくれる！)

「あつ、あはは、そうだよ、そうだよ」

それで吹っ切れた。サツ、とすぐに立って、思った。

(そうだ、目的を忘れるな。それだけは忘れてはいけない。忘れるのは――過去だけだ！)

(僕には、もうお母さんしかいないんだから！)

「だよなあ、だよなあ！ アイツらなんて関係ないよなあ。所詮は他人なんだからよお！ たかが三年間同じ学校にいたからって、その程度なんだよお！ 未来は一人で生きていくんだからさあ！」

心が落ち着いた、気がした。さっきまでのバケモノは追い出した、気がした。部屋の中なのに、風が吹いてきたような、気がした。新しくはないが、今の僕にとつて、暖かい風が。

なんで「気がした」を強調してるかって？

そうだよ、無理やりそう思いたかっただけだからだよ。

そして僕は机へ向かい、医学書を読み始めた。頭の中に知識が入り込んでくる。だがいつも以上に苦労しなかった、ような気がした。読みながら、僕は何故か笑っていた。そこにあるのは楽しさではなく、狂気だった。

数ページ読んで、急に思考が停止した。文字を認識するための目が開いているだけだった。次に頭が激しい痛みで襲われた。連続でボクサーに頭を殴られているかのような気分だった。さらに目も閉じてしまった。

そしてついに、僕は意識を失った。

思えば、当然だった。

肉体的な過労と、精神的な過労。どちらも、あまりに強烈すぎた。前者は、少しずつ降り積もっていったもの。後者に限っては、今までに溜まったものと、何の子兆も無く一気に来たものの二つ。とても耐えられるものではなかった。

電話が鳴り始めた。その音で僕は目覚めさせられた。耳障りに思いながらも、仕方なく電話をとりに行くことにした。椅子から立った瞬間、足がふらついて倒れた。電話は鳴り続けている。両腕に力を入れ、もう一度立ち上がる。今度は転ばずに済んだ。ジリジリと痛む頭は、ただ受話器を取るために腕へ指令を送るだけで悲鳴を上げていた。

「……もしもし、赤星ですが……」
「望君……私です」

相手の声は痛む頭のせいであまり認識できなかったが、なんとかその声は医者のものだと分かった。

「……どういったご用件で？」
「……」

「医者は黙ったままだった。何を躊躇っているのかは知らないが、……今僕は体調が良くないので、出来れば早く言っていただけませんか？」

「……、」
「まだ口を開かない。なんなんだよ、と思ったが、やっと話し始めた。」

「……いいですか、よく聞いて下さい」
「？」

「これから伝えることに対して、望君も私も、耐えなければなりません。乗り越えなければなりません。特に望君……、君はまだまだ若いのです。未来が待っています。これから先、このようなこと……もしくは、もっと残酷なことを経験するかもしれません。ですが、それでも、逃げ出したり、自分や周りを傷つけたりしてはなりません。それが宿命であり、義務なの

です。」

自分の全神経、第六感、本能、全てが、不吉な、それも自分にとって最悪で最低の知らせをしてくる。まさか。肺が痙攣しそうなくらい、呼吸が荒れてくる。まさか。中で悪魔が暴れだしているのかのごとく、心臓の鼓動が加速させられる。まさか、まさかまさかまさか……！

「……望君のお母さんが……お亡くなりになりました」

……
……
……

……

このとき、僕は死んだ。誰がなんと言おうと、確かに死んだ。この世から赤星望は、跡形も無く、消えた。

それから、僕はからっぽのまま生きていた。成長したのは身体だけだった。

病院のベッドは居心地が良い。あと、位置的に外の風景がまったく見えないのも良い。もう自然を感じても喜びを感じることが、自分には出来なくなってしまったのだから。

僕はどうやら精神科病院にいるらしい。あのとときの電話で僕は何ともいえぬ叫び声を上げたらしく、異変を察知した医者が僕の家に来て、ここへ連れてきたそうだ。

今僕は何歳なのだろう。多分二十代後半と言ったところか。だとしても腕や足が細すぎる。退化したというのか？

そういうえば、ずっと前に相沢がここへ尋ねたようだ。彼を応対した看護師が僕のところへ来て、こんなことを言っていた。

「赤星さんのお友達がお見舞いにいらつしやいましたよ」

「ああ、名前ですか。ええと、相沢さんという方です」

確か、それを聞いて、

「会いたくないです。だって、僕のことなんか、消えればいいって言うていましたから」

そう、やけに落ち着いて答えたのだ。まるで、過去の事実だけを覚えていて、その時の感情だけを忘れたかのよう。

現に、学生の時のような心情にとらわれたことは、ここに来てから以来一度たりとも無い。お母さんと過ごす温もり。友達のいない孤独感。お母さんが弱っていく悲しみ。相沢と過ごした時間の楽しさ。お母さんが倒れた絶望感。友達が消えたときの感情。お母さんが死んだときの感情。

つまり、僕は人間としての感情が希薄に、いや、それら全てが消え去ったのだろう。赤星望が死んだとは、こういうことだ。今の僕は赤星望ではない、別の何かだ。

さて話を戻すと、それを看護師が相沢に伝えるに行き、どのくらい待ただろう、かなり時間が経った後、またさっきの看護師がこちらに来た。でも、顔といい様子といい、やけに敵かな印象が見受けられた。だから僕が先に口を開いた。

「どうしたんですか？」

すると、

「相沢さんはお帰りになりましたが、手紙を預かったので、赤星さんにお渡しします」

「見たくないと言ったら？」

「それでも、それでも、赤星さんはこれを読まなければなりません」

「それじゃあ見せてもらおうか」

看護師は真剣そのものであったが、どうしても僕は緊張感を持てなかつ

た。どうせ言い訳かくだららない世間話だろうと予想していたからだ。

看護師はポケットからカサカサッ、と一枚の紙を取り出した。

「……これが先ほど、相沢さんが書かれた手紙です。どうぞ」

渡された手紙は、印刷用のA4の紙だった。看護師は手紙用の紙を見つけれなかったのだろう。

紙には、どういうわけか、何度も消しゴムで消した跡が多数あった。とても小汚かった。

肝心の文章は、このように書かれていた。

「赤星くん、元氣？ 僕がここに来たのは、あくまでお見舞いが理由だよ。でも、赤星くんの言っていたことが気になったから、それをここに書くよ。本当なら直接会って話したいんだけどね。」

看護師さんは、『僕が赤星くんにひどいことを言った』って赤星くんから聞かされたみたいだね。

でもね、僕はそんなことを言った覚えは、無いんだ。間違いない。だって友達だもん。

だから……すぐく言いにくいんだけど、赤星くんは聞き間違え、又は幻聴を聞いたんじゃないかな、って僕は思う。

正直、ここ数ヶ月の赤星くんは疲れに疲れすぎていた。僕だけじゃなく、誰が見てもはつきり分かるくらいに。そんなコンディションなら、多分だけど、幻聴を聞いたりしてもおかしくないと思うんだ。勿論、僕は医学なんて全然分らない。けど、多分そうじゃないかな、って思う。

そしてそれを考えると、どうして僕は赤星くんを休ませることが出来なかつたんだ、って悔やむ。心から。僕がもつと赤星くんのことを理解していれば、もしかしたら、赤星くんはこんなにまで苦しまなくて済んだのかも知れない。だから、自分に腹が立つ。そして、ごめん。気付いてあげられなくて、本当にごめん。傲慢だと思うだろうけど、これが僕の気持ちなんだ。

赤星くんが、これからどう生きるのか、僕は分からない。でも、これだけは言える。

自分自身ほど脆いものは無い。けど、自分自身ほど頼れるものも無い。

勿論、信頼できる友達を持つに越したことは無い。だけど、最後は自分自身しか頼ることが出来ない。分かるよね。

なんか変なこと書いちゃったけど、許してね。

それじゃあ、時間があったらまた会いに来るから。

僕も頑張るから……赤星くんも、はやくこっちに来てね。

相沢海斗

読んでみたが、僕は相沢が何を言っているのか、全く理解できなかった。

いや、ただ、赤星望という人間が、こんなにも哀れな生き物だということを、認めたくなかった、それだけだった。

次の瞬間、僕は泣いていた。過去の自分よりも、未来の自分よりも、激しく泣き続けた。

くしゃくしゃに歪んだ顔には、たくさんの涙があった。そして、少しの人間らしさがあったように見えた。

あとがき

こんにちは、新道知樹と申します。

前回の反省を踏まえて書いてみたのですが、如何だったでしょうか。

今回の物語はなんだかありがちのパターンな気がしますが、自分では考えに考え抜いたストーリーなので、読んでよかったと思って下されば、これ以上の喜びはありません。

主人公のような性格の人は、現実には何人かいるような気がします。将来の夢が無いとか、気持ち折れやすいとか。特に現代の日本にはたくさんいても不思議ではないと思います。

日本での年間自殺者数は、一九九八年以来十三年連続で三万人を超えたそうです。原因は何だどこで論じるつもりはありませんが、この事実が今回の小説を書くきっかけのようなものになったことは、ここで述べておきます。

さて、最後になりましたが、冊子作成に関わって下さった方々、そして、ここまで読んで下さった方々へ感謝の意を表しつつ、ここで筆を置かせていただきます。

それでは、さようなら。

30円玉が転がる。

しばらく眺める。そしてつまむ。

「初めて見た、こんなの」

30円玉が蛍光灯の連続波を反射して輝く。

《平成きつと25年》

裏面にはそう書かれていた。

「使えるのかな？」

ふと、疑問が浮かぶ。

「……まあ、試してみよっかな」

「お客様、大変申し訳ありませんが、こちらは使用できません」
無理だった。

財布の中の10円玉3枚と取り換えて会計を済ませた。

お金というのは不思議なものだ。

何処の誰が何をしたかもわからない物体を、こうも平然と持ち歩けるのだから。

お札で鼻をかんだかもしれないのに。

回転テーブルに乗ってくると回りながらその身に受けた明るさを減衰させながらお返しだよ。

《平成きつと25年》

その文字が一際目立つ。だからひっくり返す。そうしたら目立たなくなる。

目立たなくなるとつまらないから、もう一回ひっくり返す。文字再来。

「結局これって何なんだろう？」

くるくるくるくる。垂直コインを爪ではじいて回転。倒れるまで放置。

倒れたとき、30の数字が少し光った気がした。

そして。
にゅーん。

オレンジ色の何かが。こう、にゅーんと、頭を出した。
それは三角錐形をしていて、そのままだんだん伸びる。
最後に緑色っぽい冠を底につけて、静止。

「……うん、人参だね」
ころん。バランスを失った人参は倒れた。
そこに間髪入れずにゅーん。また三角錐。そしてまた。

「……止まったかな？」
にゅーんが収まる頃には、きれいな人参空間が完成していた。
だから今日の夕食は人参尽くしなのだろう。きつと。
浮遊する人参たちの全体集合、それと。

《平成きつと25年》はなんだか輝きを少し失っていた。
人参の対価、なのかもしれない。

日は西へ消えた。その残光が空間を人参色に染める。
時間の経過とともに、30円玉は輝きを失っていった。
そして残光が尽きたとき、その輝きも尽きた――。

夜は更ける。空には星々が輝かない。灰色の水蒸気が天空を囲う。
みつめる。ゆっくりみつめる。そこに光はない。

太陽が山の合間を縫って這い上がる。その放射線が瞼を通り、脳に目覚めの刺激を与える。
炊飯器が音を奏でる。意味は《ごはんがたけましたよ》。

「朝……かあ……ねむっ」
伸びをふたつして、炊飯器の中身を頬張る。それはとつても人参色。

30円玉はそのままそこにあつて、輝きを取り戻していた。

「ああ、なんだ、周りが暗かっただけか」

人參たちもそこらじゅうにいた。食べた分は減ったけど。

「改めて、こんには世界」

窓を開け放ち宣言する。ハローワールド！

「お客様、大変申し訳ありませんが、こちらは使用できません」
やっぱ無理だった。

50円玉一枚に割り込みを許す。

それから、30円玉からにゅーんすることもなかった。

人參は10日で食べきった。

それでも、《平成きつと25年》はそこに光のある限り輝きを保っていた。

それに気付けたあたしは満足だ。

そこは、マンガやライトノベルの散らばった、整理されているとはお世辞にも言えない空間。

「だからさ、長い髪というのは古来日本人が感じて来た女性の象徴なわけであって……」

「女性の象徴はあくまで胸や腰であって、必ずしも……」

「髪の長さ、髪を結ぶという元気さ、うなじの見える色つぼさ。ポニーテールはこれを全て兼ね備えて……」

「短い髪には少女らしさ、活発さがあったてだな……」

ポテチ、カップラーメン、コーラなど、ジャンクフードの匂いが充満する中、少年達は互いの意見をぶつけていた。

その議題は「女性の髪形はどれが一番か」ということ。

「黒髪ロングのあの美しさに勝るものなどこの世に存在するのだろうか、いやしない」

「僕も長い方が好きだけど、黒髪ロングは露骨に男受けを狙っててあざとい感じがするよ」

「あざとい？ 黒髪ロングの少女はイコール文学系だ！ 清らかなんだ！ あざとい訳が無かるう！」

「……二次元のただけで言うなら確かにそうだね」

「だろ？ だろ？」

少年、ズズズズ、とカップラーメンを吸った。

「まあ、暗髪ロング以外の長い髪も嫌いじゃないけどな」

「男女平等のこの時代じゃ大きな声で言えないけど、長い髪には女の子らしさがあるんだよね」

「黒髪ロング最強。それ以外の長い髪は及第点。短い髪とか女じゃねーよ、男だ男」

その言葉に、ハンバーガーを食っていた少年が反応する。

「……田宮、それはショートフェチキングたる俺に対する宣戦布告と受け取っていいな？」

「なにがショートだ、活発とかいって生意気な女しかないじゃねえか」

「あんだと？ お前はツンデレを否定する気か？」

「悪いな、世の中のツンデレの半分以上は髪が長い！ 主にツインテール！」

「髪の長いツンデレはデレが多すぎる。運動部系のショートのツンデレはツンとデレの比率が絶妙なんだよ！」

「……二人とも、その統計はどこから取ってるの？」

「数字じゃない！ ハートで感じるんだ！」

「あ、そう……」

二人にツツコミを入れた少年、倉持はポテチを摘まんだ。

その瞬間、

バンッ！

と、ドアが勢い良く開いた。

「ちよつと、聖！」

侵入者の姿は不意を突かれた一同をジロリと睨むと、一人の少年のもとへズンズンと寄って行った。

「あんた、何やってんのよ！」

「え？ 何が？」

「今日、あたしの買物に付き合う予定だったでしょうが！」

怒鳴られた少年、四人の中でダントツに顔が綺麗で頭もよい高畑は、三秒ほど硬直した後、こめかみを押さえ、そして思い出すように一言。

「……あー」

「……あんた、忘れてたわけ？」

「すまん」

「ふーん……」

男四人しかいないむさい空間に突如出現した少女は、氷並みに冷たい視線を高畑に向けていた。

「……この間のクラスの子と一緒に遊ぶ時には五分前に来たのに、あたしとの約束は忘れるわけ」

「……え？ その情報どつかから手に入れ……」

言っている途中で何かに気付いたらしき高畑が恨みの籠った目で倉持を見る。

「……ふ。ふ。……く、ふふ……」

対して、必死に笑いをこらえている倉持。

「くううウウウウウもおおオオオオちくううウウウウン？」

某白人状態になった高畑。しかし、その胸倉を少女に掴まれる。

「どこから情報を手に入れたかなんてどうでもいいのよ！ さっさと行くわよ！」

「……今すぐ？」

「今すぐよ！」

グイッ。

「おま、ちよ、引っ張るな！ 服が伸びる！」

「あんたが抵抗するからよ！ さつさと来なさい！」

「分かった！ 分かったから！ あと倉持赦さねえぞ！」

「分かったんなら早く来なさい！」

少女に胸倉を掴まれた高畑は、彼女に連行されるように部屋を出て行った。

そして、それを追うように、このアパートの部屋の主である田宮が出て行った。

「ん？ なんで田宮まで出てくんだけ？」

「田宮君の部屋だからね、鍵閉めるのは彼がやらないと」

「なるほど」

倉持の説明に鐺木が頷いた。

「しかし、お前、相変わらず黒いよな」

「そんなことないよ。それより、あの二人、尾行すると面白そうだよね」

ケロツとした顔で倉持が発言した。

「僕、ちよっとつけてくるよ」

「……お前、黒いよな」

「僕は日焼けなんかしてないよ？ 照明の当たり方で黒く見えるだけじゃない？ じゃあね」

腹黒少年は鐺木に小さく手を振って、いそいそと出て行った。

「……自覚してるのか、してないのか、どっちだ？」

鐺木は考えようとしたが、途中で田宮が戻って来たため、やめた。

「……で、なんで俺が呼ばれんの？」

退室した高畑と倉持の代わりに呼ばれた少年、角田が口を尖らせる。

「いいじゃん、どうせ暇だったんだろ？」

「普通に真面目に勉強してたんですけど」

「ほら、暇じゃん」

「……お前ら……」

鐺木の言葉に角田が辟易した。

「まあ、お前を呼んだ理由はちゃんとあるんだよ」

「そうなのか？」

「勿論」

田宮はカップラーメンのスープを飲み干し、角田に告げる。

「幼馴染の少女とデートまがいのことをしている高畑や、クラスの女子と一緒に遊びに行くような倉持など、俺の周りにはリア充が多くて、お前以外に暇な奴いなかったんだ」

「一発殴っていいか？」

「まあ落ち着けて」

握り拳をわなわなと震わせる角田を、鏑木が制する。

「高畑とあいつの幼馴染見てて思い出したんだけど、来週バレンタインだろ」

「唐突になんだ」

「俺ら、恵まれない男達はバレンタインにどうすべきか、考えようと思うんだ」

「……は？」

角田は口をポカンと開けて問うたが、田宮も鏑木も用件は伝えたと思っっているのか、答えなかった。

「とうわけで、まずはどのようにして本命チョコを貰うのか、だな」

田宮がガラガラガラとホワイトボードを取り出した。

「……待て、今、この部屋のどこからそれ取り出した」

「細かいことは気にすんなよ」

「こんくらいで驚いてたら田宮んちで遊べねえぜ？」

「……」

辟易する角田。

「さて」

一人置き去り状態の角田を尻目に、田宮が黒ペンでホワイトボードにでかでかと文字を書いていく。

今日の議題「バレンタイン対策」

「まず、俺が思うに、俺達モテない組はフラグを立てることを怠りすぎたのではないかと思う」

田宮のその発言に、鏑木は頷き、角田は溜息を吐いた。

「フラグ……。フラグねえ……」

「なんだよ角田、不満そうだな」

「こんなくだらん会議に付き合わされてんだ、不機嫌にもなる」

「そんな風にノリが悪いと、いつまでも童貞だぞ」

「よし、その会議乗った！」

角田のテンションが上がった。

「よし、角田がノリノリになったところで、始めるぞ」

田宮が号令をかけつつ、ホワイトボードに文字を書き込んでいく。

パターンその一

主人公「遅刻する！」

ダツシユする主人公。

曲がり角に差し掛かり、知らない美少女と衝突。

少女に謝りつつ、下着が見えてしまう。

少女「きゃー！ 変態！」

逃げ出す少女。

その後、教室にて。

友人「転校生来るらしいぜ」

主人公「へー」

先生「静かに。転校生を紹介します」

少女「初めまして、〇〇です。……あれ？」

主人公「ん？ どこかで見たような……」

少女「あー！ 今朝のパンツ覗き魔！」

主人公「あれは誤解だ！」

先生「あら、知り合いなのか？ じゃあ、××君（主人公）の隣に座ってね」

主人公と少女「えー！」

「それ、何？」

一通り書き終わった田宮に、角田が率直な質問をぶつける。

「見ての通り、ヒロインとの出会いのパターンを書いてみた」

「えらくテンプレートだな……」

「だが、王道と言うことはそれだけ実績があると言うことだ」

胸を張って堂々と答える田宮。どうやら、ギャルゲないしエログゲのヒロインとの出会い方を簡略化したものを書きあげたようだ。

「……で、その王道パターンが何？ まさか、それを参考に女子を攻略しようとか思っていないだろうな」

「お前凄いな！ 俺の心読みやがった！」

「……」

基本的には田宮と同じくらい軽い性格をしている鏑木も、これには呆れた。

「あんな、ゲームと同じように現実の女子を落とせるわけないだろうが」

角田も同様だったらしく、田宮にツッコミを入れるが、しかし田宮は眼鏡のツルをくいと人差し指で持ち上げて言い放った。

「決めつけちゃいかんよ鏑木。物語というのは少なからず現実の話をモチーフにしているものだからな、こういう物語があるということは即ちこういうストーリーが現実に存在したことを証明する確固たる証拠となるのだよ。事実は小説より奇なりとも言うしな」

「……」

これがいわゆる「仮想と現実の区別がつかない人」ってやつか、と二人は思った。

「……仮に、そのギャルゲ戦法で女子を攻略していくとして、だ」

鏑木が口を開いた。

「あと一週間でどうしろと？」

「中には一週間で女子を攻略する主人公も存在するぜ？」

「それはもとから主人公がヒロインに好かれているからだろ」

「……それだ！」

田宮が「閃いた！」と言いたげな顔で叫んだ。

「だろ？ だから今更バレンタインまでに攻略なんて無理……」

「そうだよ、その手があった」

「……は？」

鏑木は、田宮が何を言っているのか分からなかった。

二回ほど瞬きし、助けを求めるように角田の方を見たが、角田は肩をすくめるだけ。

鏑木は仕方なく、田宮に訊いてみることにした。

「……その手って、どの手？」

「今から書いて説明する」

田宮はそう言って、先の「パターンその一」の横にまた文字をつらつらと並べていく。

パターンその二

部室でお菓子を食べている主人公達。

主人公「恋人が欲しい」

幼馴染「……ふーん」

不機嫌になる幼馴染（ヒロイン）。

主人公「なぜ不機嫌になる」

部活の後輩「先輩相変わらずそっち方面はダメですね」

主人公「どういう意味だ」

そこに登場する生徒会。

生徒会「お前達の部活は実績がない。潰す」

主人公「それはダメだ」

主人公、次期生徒会長に立候補することを決意。

部員達と協力して見事当選し、廃部の危機を免れる。

人間的にも成長した主人公。最後に幼馴染（ヒロイン）が告白。

「……あのさ、田宮」

「どうだ？ これ良くね？ 幼馴染じゃなくても、仲のいいクラスメイトとかでも全然可！ 最初から好かれてなくても選挙運動の途中で好かれれば可！ 別に生徒会が絡んでこなくても、とにかく部活の仲間と協力して危機を乗り越えられれば可！ 俺天才！」

「いやあの。田宮、これは……」

「あ、ちなみにこのストーリーの参考は『恋と選（以下略）』な。ちょっと改変してるけど」

「そうじゃなくて、俺達は……」

「まあ、確かに顔はちょっと主人公とは言えないが、まあ及第点くらいはあるんじゃないか？」

「そういう問題じゃない」

「さっきからうるさいな。一体なんだ」

「俺達、全員帰宅部だよな」

「……そうだった」

自分が部活に入っていないことすら忘れていた田宮はがっくりとうなだれた。

「ならば、どのルートで攻略すればいいんだ……？」

「だから、ゲームの話をもとに攻略するのが間違ってたんだよ」

「……」

角田の的確な発言を受けてか否か、眉間にしわを寄せて考える田宮。

「俺達はまず、義理チョコを貰うことを第一にすべきだな」

「ある程度仲のいい女子とバレンタインまでに何度か話しておいて、好感度あげるか」

「そういえばこの前女子から聞いたが、事前に『チョコ欲しいな。義理でいいから』とか冗談で言うのと、渡す側も安心して渡せるらしいな」

「なるほど、だとすると……」

鏑木と角田が二人で話を進め始めた。

その間ずっと、田宮は真剣に脳内回路を回し続けていた。

そして、一週間後

バレンタイン当日。

「これチョコね」

「うん、ありがとう」

倉持は本日七個目の義理チョコを手に入れていた。

「なんだかんだ言って、モテる奴の方が義理チョコも多いんだな」

「……そうだな」

鏑木も角田も、今のところ貰った義理チョコはなし。

一応、仲のいい女子に声はかけたものの、「あげるわけないじゃん」と笑いながら一蹴されたのだった。

「高畑は今頃どうしてるだろうな」

「あいつモテるから、本命も結構貰ってるんじゃないか？」

「で、幼馴染にやきもち妬かれています、と」

「リア充爆ぜろ」

鏑木と門田は廊下の隅で恨み骨髄といった目線を他の男子生徒に向けていた。

「……そういや、田宮はどうしたんだ？」

「ん？ そういや今日は見てないな」

一週間前にあいつの家行った時にやたら考えこんでいたが、何を考えていたんだろうかと、その刹那。

ブルルルルルルルルッ！

「うおっと！」

鏑木のポケットから振動音が響いた。

鏑木が制服のポケットから携帯電話を取り出す。

「……田宮から？」

噂をすればなんとやら、とはよく言うが、随分なタイムミングでメールが来たものと鏑木は少し恐ろしくなった。さて、そのメールの内容とは

「屋上に来い」

屋上。

「……」

二月の寒空の下、爽やかな風が吹き抜ける屋上で、田宮と、その正面に立つ女子生徒。

鏑木と角田は屋上のドアに隠れてその二人を、固唾を飲んで見守っていた。

そして……。

「あ、あの！」

二人は、信じがたい光景を目にする。

「好きです！ 付き合ってください！」

田宮が、女子に告白していた。

勿論、振られていた。

二人が聞いた女子の言葉は「やだ！ キモイ！ サイテー！」だった。そして、それを言われた田宮はしばらくの間そこで硬直していた。

あとがき

これは……オチがあると言えるのでしょうか。

こんにちは。生まれてこのかた告白をしたこともされたこともない日高春です。

大した収穫もなく幕を閉じたバレンタインを題材に書いてみました。

感動の恋愛物語など自分に書けるはずもなく、またくだらない方向に行きました。

しかし、今まで書いた作品の中では最もまとまっている作品だと思います。まとまっている分平坦で面白くないかも分かりませんが、その辺も含めて自分の作品だと思っています。

桜が散る頃、雨が降っていた。らしい。隣人は昨日何か叫んで消えていった。らしい。……まあ、これはよくある話だ。だけど、

√7が降ってくるなんて、滅多にないよ。

正直困る。文字だからこそ表せるけど、視覚情報ではどうしようもないし、どうしようもない。だけど、降ってきちゃったからにはどうにかしないとイケない。なぜ。ほかに誰もいないから。

本を買って読んだ。無人の本屋は今日も寂しい。そしてさっぱりわからない。可視化するためにとりあえず√7を自然数にしようと思ったけど、この本やっぱり難しい。数学苦手なんだよ、もうっ。なんとか自然数にさえできれば、何とかかなりそうな気がするんだけど、難しいから無理。

みゅー。

猫が鳴いている。ああ、そうだ。

《自分にできないことは誰かに任せろ》、か。

はい、どうぞ。猫さん。

猫さんは√7を猫背に乗せて、ゆっくりと歩いていった。

√7が降ってきた空間は、いまではもう何もないただの空間だった。そして、何もないただの空間が、それもそれでそれはそれはすばらしい空間なのかな？

後書き

小金井ささら

こんばんは。後書きの時間です。また深夜からお送りします。
そして今回もまた短編×7本（詩も短編に含む）です。いかがでしたでしょうか？

あ、ホームページの件ですが、完成しました。サイト名（＝サークル名）は「直線創作」、
アドレスは <http://straight.suki-ari.net/> です。よろしければ訪ねてみてください。

さて、今後ですが、やはり宇高祭配布冊子までは参加しようと思います。そろそろ中編以上の長さにも挑戦してみたいな一とか考えています。この表現87と宇高祭の間に他の企画があるかは未定ですが、あったらそれにも参加してみるかなど。あと、Project.Greenとかも、そろそろ再起動しようという声が出ているので、それも。

というわけで、宇高祭63でお会いしましょう。